

日本語の再発見

漢字の欠陥

中国語の欠陥は、そのまま漢字の欠陥につながる。漢字は、中国語をそのまま視覚に訴へる“視覚言語”であるから、それは当然の事である。

ただ、“聴覚言語”のやうに、即座に受取れなくても、“視覚言語”の漢字は、理解できるまで待ってゐてくれるので、理解し難いといふ欠陥はやや緩和されるのではないだろうか。

然し、格変化も活用もテニヲハも無い漢字が長く並べられてあると、いろいろな解釈が出来て、正確な理解が困難であることは、我々は昔から中国の古典の研究でいやといふほど味はって来てゐる所である。

もう一つ、漢字には大きな欠陥がある。それは、発音記号を創作しなかつた事である。そのため、難しい漢字の発音を示すのに、それと同じ発音の易しい漢字によってこれを示すか、もしくは“^{はんせつ}半切”といふ方法によってこれを示さなければならなかつた。これが、漢字の学習を困難にし、そのため、長い間、多くの民衆を文盲にしてみたのである。

例へば、「謙 読為慊」とか「閒 音閑」とかとあるが、これは「謙は慊と同じ読み方をする」といふ説明であり、「閒の発音は閑と同じである」といふ説明である。しかし、この説明では、“慊”や“閑”の発音が解らな

い者にとっては全く解らないことになる。

「胖、歩丹反」とか「忿、弗粉反」とかとあるのが“反切”である。これは「胖は、歩の頭韻“h”と、丹の脚韻“an”とを合せた“han”といふ音であること」「忿は、弗の頭韻“h”と、粉の脚韻“un”とを合せた“hun”といふ発音であること」を表したものである。

これも、やはり、“歩・丹”“弗・粉”といふ字の発音が解つてゐて、初めて解ることであつて、反切に用ひられる漢字の発音が解らなかつたらどうにもならない。ところが、その漢字が、無数と言ってもよいほど沢山あるのだから大変である。

我が国では、音節の数が少なかつたので、“万葉仮名”から“平がな”や“片カナ”といふ簡単な字体を発明する事が出来た。それで、難しい漢字のわきにカナを振っておけば、子供でも容易に読むことが出来たので、早くから教育が開け、学問が進んだのである。

しかし、中国では、音節の数がひどく多かつたので、我が国のカナのやうな音声符号が考案されず、従つて、文字の学習が困難で、そのため、国民の大半が文盲である、といふ状態に陥つたのである。